

最終章・ゆとり教育世代の地域教育

子のやる気 親の気づき

〇〇83・完



21世紀は心の時代と言われ10年がたちました。ゆとり教育世代の子どもたちは、完全週休2日制の学校で、約3分の1薄くなった教科書を使って学んできました。しかし、学校現場は今年から「脱！ゆとり教育」へかじを切りました。子どもた

言葉

ちにとっては突然の方向転換です。週休2日制のままなのに教科書が約5割も増えることになり、「学力格差」はますます顕著になっていくのでは、と心配されます。

私は、「学力格差」は親の情報力と経済力によっていくらでも挽回可能だと考えています。「成績が伸びません」「やる気が見えませんが」と安易におっしゃるご家庭は、どちら

「学力格差」は挽回可能



by yoriko

興味・関心育む環境を

かという豊かな生活の中で「わが子には安全・安心・便利な合理的な方法を」と願うようです。例えば、寄り道よりも近道を、部活と勉強の両立よりも、どちらかに専念させた。しかし、親に情報があり、経済的に余裕があれば「どちらかではなく、どちらもやらせてみたい」「howではなくwhyを」と子どもの興味・関心を優先した教育環境を求めてきます。

物質が豊かになると心の喪失が生まれま。そして、生活様式の合理化が地域固有の伝統や文化を解体していきます。育った地域での遊び、祭り、冒険

よりも、プライベートの守られたマイホームという囲みの中で、与えられたゲームに興ずる子どもたちは、退屈をしのぐ工夫という興味・関心を育む好機も奪われています。

先日、授業で「蛙(カエル)の子は蛙」ということわざについて質問したら「帰る子は家に帰る」と中3女子が答えました。教室は笑いに包まれました。するとそれを大笑いしていた男子が突然「蛙の子は卵からかえるということだよ!」と物知り顔で言っていました。

教室中爆笑に。次々答えてみましたが「蛙の子は蛙の正しい意味にはなかなか到達できませんでした。ゆとり教育の中、教科書

が薄くなり、子どもたちの言葉の力は貧困になってしまったのかも。それが周囲への関心をますます希薄にし、他人との関わり方、話の捉え方にまで影響を及ぼしているのかもしれない。

言葉の力は想像力の源です。しかも、うそやほらが混じっているくらいがイメージを膨らませ、言葉が別の言葉と関連を持ってどんな語彙(ごい)力を増やしていきます。私は授業中によく世界の話をします。世界の話をします。宇宙の話をつむれば、己の内に豊かな人生、それは磨き抜かれた言葉の世界かもしれません。人は言葉に出会いたいから学ばね

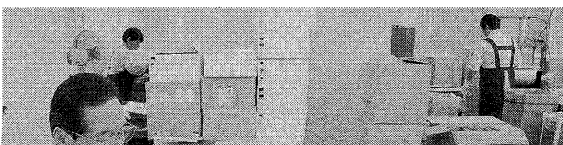
ばならないし、人生という旅をするのではないのでしょうか。きっと、人は人に出会うために生まれてきたのです。そして、あくまでも人は人が育てます。子育てとして教育は、まさに親の気づき次第だと思います。

(畑山篤志学塾 長)

技が生色

小学校にら、みんながインドセル。昔ぐらいいかたど、今は水色、茶色、すくくカラフザインもハイどとても豊富います。ではインドセルは作っているのいますか?

創業60年の「カー」協和場(千葉県)ピーク時には以上、年間のインドセルを制します。工場の約130人のそれぞれの専



子どもに大切な「なぜ」

教育

問題視されている子どもたちの「理科離れ」。声が上がりに始めて20年近くになるので

のとして終わっていたり、応用編などのフォロワーがなかったりする

す。連載では、子どもたちが理科嫌いを正するために、保護者皆さんが家庭や週末外出時などに実践する方法を紹介しま(西村則康)家庭師名門指導会代表、ラストはナカヤマ

は、単なる美談をしてあげ

のこりです。

ま、身元を大切に